

<特集論文>ドラマの中の文：能「敷地物狂」を中心に

著者	西野 春雄
雑誌名	日本文学誌要
巻	57
ページ	70-84
発行年	1998-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019993

ドラマの中の文

——能「敷地物狂」を中心に——

西野 春雄

一文の性格

能や狂言には、手紙や文書を読む場面が少くない。一般に〈文〉と呼ばれることが多いが、ここでは手紙だけに限定せず、手紙はもちろん、以下に触れる各種の文書も併せ考えていくことにしたい。梅若謡本などでは〈文〉のほかに〈状〉などと注記することも多い。

まず、能や狂言の〈文〉の類の主なものをあげてみよう。

【能の〈文〉の例】

（赦免状・御教書・諷誦文なども含む。傍線を付した

作品は廃絶曲。「」が文や文書の主文）

1 「鞍馬天狗」の文

鞍馬山の花見の誘い

「一筆啓上せしめ候古歌に曰く、今日見ずは悔しからまし花盛り、咲きも残らず散りも始めず」、げに面白き歌の心。

2 「俊寛」の赦免状

鬼界島の流人の内俊寛一人が洩れる

何々「中宮御産の御祈りのために、非常の大赦行はるるにより、国々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の内、丹波の少将成経平判官入道康頼二人赦免あるところなり」。

3 「六代」の御教書

文覚上人が馬を走らせ処刑寸前の六代御前
(平家最後の嫡統)を救う

何々「小松の三位の中將維盛の御子六代御前、
高雄の御坊の申し給ふにより、助け置くところ
なり、相違いなく渡さるべく候、北条四郎殿へ
頼朝判」自筆なり自判なり。

4 「自然居士」の諷誦文

少女が身を売って求めた小袖に添えた亡き
父母へ捧げる諷誦文

「敬つて白す請くる諷誦のこと、三宝衆僧の御
布施一裏、右志すところは二親精靈頓証仏果の
ため、身の代衣一襲ね、三宝に供養じ奉る」、か
の西天の貧女が一衣を僧に供ぜしは、身の後の
世の逆善、今の貧女は親のため、

「身の代衣恨めしき、身の代衣恨めしき、憂き
世の中を疾く出でて、先考先妣諸共に、同じ台
に生まれん」と、読み上げ給ふ自然居士。

5 「柏崎」の文

父と鎌倉に滞在中、父の病死に出家を決意
した少年が故郷柏崎の母へ宛てた手紙
「恐れながら申し候しても沙汰の事、喜びにも
なり候はば、急ぎ帰らんとこそ思ひ候しに、父

御前労はりつき給ひ、いかがと騒ぎ申せども、
無常の習ひ力なく、終に空しくなり給ふ、心の
うちの悲しさは、ただ思しめしやらせ給へ、わ
れも帰りて御姿、見参らせたく候へども、思い
ひ立ちぬる修行の道、もしや留められ申さんと、
思ふ心に障^さへられて、心強^こくも出づるなり、命
つれなく候はば、三年^{みとせ}のうちに参るべし、様々
の形見を御覧じて、心を慰めおはしませ」と、
書きたる文の恨めしさよ。

6 「刈萱」の遺書

わが子や夫との再会を祈りつつ、病の母が
旅の宿でしたためた文

「それ有為の転変を見るに、彩雲は散じやすく、
瑠璃は脆し、本の雫末葉の露の下草の、後れ先
立つ世の習ひ、今はじめたる歎きと思はずして、
父にも尋ね逢ふならば、同じ如くに様を変へ、
みづからが菩提を弔ふて得さすべし、それにつ
きては何よりも、ただかりそめと思ひし身の、
今は帰らぬ道に出でて、中有の闇に赴く憂への
涙、悲しみても猶あまりあり、又いにしへ人の
御方へも、よろづ申したき事のみ多けれども、
次第にこの身も弱り、心さだかならざれば、さ

ながらとどめ申すなり、高野山行かぬ習ひの道なれば、煙りとなりて立ちやのぼらん」と、書き流したる水茎の。

7 「藍染川」の遺書

遙々太宰府に赴いた女が、神主の妻の偽手

紙（これもドラマの進行に係わる）に落胆し

入水。我が子に宛てた遺書

「これは梅千代が方へ書き置き候、憂き身はもとより捨て妻の、衣々きぬぎぬなれば恨みもなし、いかに情け知らずとも、子に知れぬ親の候べきか、言ひ甲斐なくは出家になし、扶持し給はば草の陰にて、守りの神となるべきなり、大内にありし時は梅壺の侍従、一条今出川の御留守、当所の御名は知らねども、御在京の御時は、中務頼澄宰府の神主」、や、言語道断の次第にて候ものかな。

8 「花筐」の別れの文

即位のため都に帰る皇子が愛する女に遣わした玉章たまずさ

「われ応神天皇の尊苗を継ぎながら、帝位を踏む身にあらざれども、天照大神の神孫なれば、毎日伊勢を拝し奉る、その神感の至りにや、群臣ぐんしん

の選みに出だされて、誘いざなはれ行く雲の上、巡り逢ふべき月影を、秋の頼みに残すなり、頼めただ、袖触れ慣れし月影の、暫し雲居に隔てありとも」と、書き置き給ふ水茎の、跡に残るぞ悲しき。

9 「桜川」の文

身を売った少年が人買いに託した母への文
「さてもさてもこの年月の御有様、見るもあまりの悲しさに、人商人に身を売りて、東の方に下り候」、のうその子は売るまじき子にて候ものを、や、あら悲しや、はや今の人も行き方知らずなりて候はいかに、「これを出離の縁として、御様をも変へ給ふべし、ただ返す返すも御名残こそ惜しう候へ」。

10 「婆相天」の売券

人身売買の事実を記した証文

何々「売り渡す人の事一人、ていればあざなしせんくわうによ、右此女は売得相伝たりといへども、様々の仔細あるにより、東国船の船頭に売り渡すところ実正なり、向後の証文のため売券の状如件、享応三年八月日、越後の国直江の津といの左衛門維介判」、これが文にてあるか。

現行曲・廃絶曲含めて、右以外にも多数あるが〈文〉の形態や性格を見るには、ほぼこれで足りると思う。

〈文〉はコトバを主とし、途中からフシに移行したり最初からフシであったりするが、フシの部分はいずれも拍子不合である。右のうち「自然居士」は特殊で、諷誦文の途中の「身の代衣恨めしき」から地謡の〈上歌〉（拍子合）になる。「身の代衣（身の代衣）」を強調することにより、少女が我が身を売って供物の小袖を買い求めたことがわかるよう工夫されている。

また、手紙や文書は必ず音読される。届いた手紙を黙読する現代人とは場面設定が違ふ。主人公は、ときに悲しみをこらえて、ときに絶望の底で、手紙を読み、文書に耳をすます。一喜一憂、一語雷震、手紙や文書は主人公の運命を左右する。

最も短い手紙は「鞍馬天狗」の文だろう。古歌を引き、全山花に覆われた鞍馬山の花見に誘う。最も劇的なのが、鬼界島に俊寛一人残される「俊寛」の赦免状であり、文覚が馬を走らせ処刑寸前の六代を救う「六代」の御教書である。安堵の御教書は観阿弥が名演をみせた「草刈の能（横山）」をはじめ、よく使われる。また「藍染川」の偽手紙も主人公の運

命を左右する道具立てとして用いられているが、これは洋の東西を問わない。

一方、少女が身を売って亡き父母へ捧げた「自然居士」の諷誦文、父の病死に出家を決意した少年が故郷の柏崎の母へ宛てた「柏崎」の文、わが子や夫との再会を祈りつつ病いの母が旅の宿でしたためた「刈萱」の遺書などの、切々たる文は、読む人の、そして聞く者の心を打つ。「刈萱」の文の終わりに「高野山行かぬ習ひの道なれば、煙となりて立ちやのぼらん」と歌を添えた形も、しばしば〈文〉に見られる。即位のため都に帰ることになった皇子が寵愛する女性に遣わした「花筐」の別れの玉章は、その文と花筐が機縁となつて女性は女御の位に就くが、「花筐」にも末に「頼めただ、袖触れ慣れし月影の、暫し雲居に隔てありとも」と和歌が添えられている。変わった文書では、人買いが横行した中世を反映して人身売買の事実を記した「婆相天」の売券である。非常に生々しい。珍しいケースだ。

そうしたさまざまな能の〈文〉の中で最も美しい手紙は、遠江の国池田の宿の病氣の老母が、都の娘熊野へ送り届けた「熊野」の〈文〉であろう。

甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪山

宮の秋の夜の月、終りなきしもあらず、末世一代教主の如来も、生死の掟をばのがれ給はず。過ぎにし如月の頃申しごとく、何とやらんこの春は、年経りまさる朽木桜、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱き、老の鶯逢ふことも、涙にむせぶばかりなり。ただ然るべくは宜きやうに申し、暫しの御暇を賜はりて、いまだ一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にもはずれ給ふべし、ただ返す返すも命の内にいまひとたび、見参らせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ別れのありといへば、いよいよ見まくほしき君かなと、古言までも思ひ出の、涙ながら書きとどむ。

対句も美しい、心情あふれるこの手紙は、故郷の母の病気の切迫を訴え、都の熊野の心を曇らせる。

狂言にも目を転じてみよう。狂言の〈文〉としては次の作品がまず思い浮かぶが、ほかにもある。手紙の文章は省略する。

【狂言の〈文〉の例】

1 「文荷」の文

手紙の使いを命じられた太郎冠者・次郎冠者が稚児千満への主人の恋文を勝手に開き、散々にこきおろしながら読み進め果ては破いてしまう

2 「文山立」の文

仲間割れした二人の山賊（山立）が、共に書き置きをして死のうと、争いをやめて遺書を書くも、内容が妻子の事に及ぶや行末を案じて泣き出し、きつぱりと死ぬのをやめる

3 「文相撲」の書

新参の者との相撲に負けた大名が、相撲の秘伝書を読み再び相撲を取る

「文荷」では、軽い手紙を二人で担って届けようとする誇張、他人の手紙を勝手に開封し盗み読む愉悦、筆跡や内容を散々にこきおろす痛烈な批評、果ては破いてしまい、風の便りと洒落て小歌を歌いつつ扇であおぐおかしさが、思わず笑いを誘う。「文山立」では、強盗山賊にはおおよそ不似合いな、矢立を出し紙をひろげて、遺書をしたためる場面が意表をつき、内容が妻や子の将来に及ぶに至り感極まって泣き出し、死ぬのをやめる場面がなんともおかしく、ペーソスさえ感じられる。相撲の最中に大名が秘伝書を読む「文相撲」も人を食っている。

今、狂言は措くとして、いずれも手紙や文書を読む場面が、劇の導入や結末となり、主人公の運命を変え、ときに絶対絶命の危機から救う。ドラマの中の〈文〉の効果もここにある。

二 「敷地物狂」の場合

このように文や文書は劇の展開の上でかなり有効な道具立てとして用いられているが、特に今回取りあげる「敷地物狂」^{しきじものぐるい}の文は、能における〈文〉の諸要素が集約され、かつ作劇の上でも効果的に使われている秀逸な作品として注目したい。

この曲は「敷地」^{しきじものぐるい}「薦物狂」^{すすうものぐるい}「菅生物狂」などとも呼ばれた。伏見宮貞成親王の『看聞日記』によると、永享四年（一四三二）三月十四日と十五日に、伏見宮御所で催された矢田猿楽の能で演じられている。十五日の番組である。

さかほこ（逆矛）・通盛卿小宰相事（通盛の古名）・佐野船橋（船橋の古名）・薦物狂・続桜事（泰山府君の古名）・よろぼし（弱法師）

右の番組のゴシック体で示した「薦物狂」がそれである。「続桜事」は「桜を続く事」とでも読むらしく

「泰山府君」の古名とされている。ちなみに「通盛」を改作し、古作の田楽能「佐野船橋」を改作した世阿弥はこのとき七十一歳、「弱法師」の作者元雅は三十歳半ばで、元雅はこの年八年早世してしまう。

さて、「敷地物狂」は室町期の作者付資料『自家伝抄』（永正十三年＝一五一六年）に禅竹作とあり、ひとつの伝承を示すものとして注意しておきたい。室町期の能伝書や、室町時代の古辞書（『運歩色葉集』等）にも記されていて、たとえば『自家伝抄』には、「物狂ひにあまたの心あり」の項目で、第二の「我と狂ひ出たる物狂ひ」すなわち夫に別れたり、わが子と生き別れになったことから物狂となり、諸国をさまよう能の例として、

百万・角田川・桜川・橋立（丹後物狂の異称）・柏崎・敷地

この能は思ひ乱れて生得我と狂ふ物狂ひなり。とある。

前述の演能記録や室町期の謡本の存在から、本曲は室町時代までは演じられていたが、江戸時代以降、ほとんど廃絶してしまったようである。

〔作品の梗概と主題〕

内容はつぎの通りである。加賀の国菅生殿の一子松若は、十二歳の時、父母のもとに文を残し、故郷を出て比叡山に上り修業していた。

能の舞台は、松若が立派な僧となつて、伴の僧と故郷の菅生へ帰る場面から始まる。季節は二月。故郷に帰ると、昔の家の跡もなく両親の姿もない。悲しみに暮れた松若は、自分が出奔した二月十五日を両親の命日と定め、供養のためと七日間の説法を行う。集まつた多くの聴衆の中に、薦をまとい乞食同然の姿となつた松若の母が居た。ワキの法師が薦を見て、導師の敷物にしたいと薦を所望するが、狂女は、こんな粗末なものを敷くよりは、ここは天神の御敷地なのだから敷物はいらないはずと言つて渡すことを拒否する。作者は場所が敷地の宮の境内であることを狂女が大切に行っている「菅薦」を踏まえて、菅生の里・菅生殿・菅薦・敷く・敷地の宮、などに寄せて文章を綴つていくが、理（コトワリ）を言つて相手をうち負かすのも物狂能の導入部分の特徴の一つで、そこから劇はさらに山場へと展開していく。

女人禁制の場に進み出て、とうとうと仏説を展開する「柏崎」の狂女や、中秋の名月に心浮かれ、禁制の鐘を撞く「三井寺」の狂女、女人禁制の高野山

に男装し曲舞々としてのぼる廃曲「多度津左衛門」^{ただつのさえもん}（世阿弥自身本が伝存）の狂女など、枚挙にいとまがない。

さて導師の説法が始まり、親子の道のあはれさを説くと、狂女は自分の身の上に思い重ね、取り乱してしまふ。説法の上質な少年僧によるこの法会の場面は、井阿弥原作の古作能「丹後物狂（橋立）」に学んでいると思われる。能では法会が劇の頂点を形成することがあり、金春禅竹作の可能性が高い廃曲「当願暮頭」^{がんぼとう}はもつとも典型的な作例である。

説法が済み、聴衆はそれぞれ諷誦物を捧げてその場を立ち去るが、ひとり残された狂女には、捧げるものは、肌身放さず持ち歩いて来た薦のほかには、何もない。狂女にとつて宝物である。これにすぎる供物があるうかと、狂女は薦を高座において泣き崩れる。導師が薦を開くと、中に古い文が大事に包まれていた。狂女の許しを得て導師（松若）が読み進めていくうちに、自分の書置きと知つて驚く。やがてこの文が契機となつて親子は邂逅する、という作品である。説法の場合の親子再会という筋立ても、「丹後物狂」に学んでいると考えられる。

三 松若の文

この作品のクラマックスは文を読む場面である。導師（松若）が狂女の捧げた薦を開いてみると古い文がある。狂女に「さて此文をば読むべきか」と尋ねると、狂女は「身のためは何よりの宝と思ひ参らせ上げて候、まづまづ讀みて御覽じ候へ」と答へ、松若は讀み始める。

子 それ世間の無常、有為の轉變、飛花落葉の眼前、後れ先だつ有様を、見ても聞きても驚かぬ、心ならひに明け暮れぬ、いつまでとてか有明の、後の世の闇に迷ふべき。然れば仏も父母を捨て、穢土を離れて樹下に臥し、石上の苔に身を置きて、山野の塵の世を捨人と、ならせ給ひし御事ぞかし。申せば憚りおほけれども、仏は十九の御出家とかや、我は生年十二歳の春、^{きさうぎ}二月の中の五日に、

と、ここまで讀んだ時、松若は絶句して言葉が続けることができない。何と、この古き文は自分が父母に宛てた手紙だった。讀み進めていくうちに、それと知った松若の驚き。そうとは知らず狂女は「何と

て讀み通させ給はぬぞ、もしも古き文なれば、文字も消え墨も落ちてや候ふらん、わらはは空に覺えて候」と言い、二、三句手前の「仏は十九の……」から諳じる。

シテ 仏は十九の御出家とかや、我は生年十二歳の春、二月の中の五日に、そら隠れとな思し召しそ、これぞまさしく眞実報恩謝の、道に出で入る修行の別れ、かまひて嘆き給ふなよ。もとよりもひとり来て、ひとり行くべき仮りの宿を、誠の親子と悲しむこと、子を思ふ親の闇路なれ。かくは申せども我も又、迷ひのうちの同じ世を、捨て定めてば又も身の、向去却來の道に出でば、再び御目にかからん事、疑はで待たせ給ふべし。定めなき、世の中々に生まれ来て、またや親子の道に逢ひなん、おほそれながら申すなり。

同 松若丸と讀み上ぐる、文は我が子の形見なれど、今は諷誦文に、捧ぐる事ぞ哀れなる。

松若は驚く。目の前の狂女が母なのだ。松若は「高座の上をこぼれ落ち」深く涙にむせび、^{ひざまず}跪き、礼をなす。乞食同然の狂女の前に高僧が跪く意外な展開。やがて二人は名乗り合い、再会の喜びにひたる。

薦を高座に捧げる狂女、その狂女を母とは知らず

諷誦に捧げた薦の中の文を読み進めるうち、自分の手紙と知って驚く少年僧。諳じる程に読んで読んで、大切にしていた我が子の文。その文が母子再会の縁となった。格調高く感動的な文面。劇の頂点をなすと同時に結末へ導くこの〈文〉の効果は実に大きく、能の文の中でも出色の内容と思われる。

作品全体の構成も憂れており、平明ながら味わい深い文章も特筆すべきで、廃絶したままでいるのが惜しまれる作品である。近代の謡曲研究の開拓者、丸岡桂は『謡曲界』大正四年三月号の廃曲詩吟の会でとりあげ、横山仙人も同誌五月号で試演を望んでいる。筆者も、かねがね関心を持ち、いつか復曲されることを望んでいたが、一九九七年二月に大阪で大槻文蔵氏たちによって復曲された。あいにくヨーロッパ留学中で観ることができなかったが、評判もよいようで、一九九八年二月、今度は梅若六郎氏による上演、三月には大槻氏の再演も決まっている。

四 作者をめぐって

いったいこの作品の作者は誰であろうか。金春禅竹作という『自家伝抄』の説もあるが、信じてよい

か。それを解く鍵のいくつかは〈文〉の中にあると考える。以下、「敷地物狂」のキーワードないしキーワードをセリフを検討してみよう。

【飛花落葉】

第一は無常の慣用句「飛花落葉」であろう。文の冒頭「それ世間の無常有為の転変、飛花落葉の眼前」というこの言葉は、世阿弥が古作を改作した「柏崎」の曲舞のサシの冒頭句「つらつら世間の幻相を観ずるに、飛花落葉の風の前には有為の転変を悟り」に学んでいると考えられるが、この「飛花落葉」は「柏崎」「簾」「西行桜」「籠祇王」など、世阿弥関係の作品に見られる言葉で、世阿弥は晩年に禅竹に伝えた『拾玉得花』でも使用しており、注目してよい言葉である。

【向去却来】

次に注意したいのが「向去却来」である。これは禅宗の言葉で、禅語辞典などによると、「向去」とは、向上を目指し正位に向かうこと、一方「却来」とは、元の境地に再び戻ることである。向去と却来を対にした表現で、いったん悟りを得た者が再び衆生の中に降りて来ることの意にも使い、簡単に、法界に向かう事と、俗界に戻る事などと説明してもいい。

この言葉からすぐ想起されるのが、最高の位に到達し、それから再び下位の芸風に立ち戻る「却来」の思想を示した、世阿弥最晩年の芸論『却来花』であろう。この書は元雅に相伝すべき芸論で、実質的には元雅はその境地を認識し悟得していたらしいが、元雅の早世により、せめて名目だけでも形見に遺そうと、永享五年（一四三三）に執筆したものである。同じく晩年の『五音曲条々』にも、有無を超越した最高の境地から再び却来した芸風の「らんぎよく闌曲」について、

闌曲者、…是は向去却来して、いやた闌けて謡ふ位曲なり。

とある。能の芸位芸風を九つに分けて説く『九位』にも「この中三位より上三花に至りて、安位妙花を得て、さて却来して、下三位の芸風にも遊通して、そのわざをなせば」などとある。ここである「却来」は、高い段階に一度到達した後に、あえて低い芸位に立ち戻る意味で用いており、晩年の世阿弥が愛用した芸道思想の言葉のひとつである。

一方、世阿弥の後継者禅竹も『五音三曲集』『六輪一露秘注』などで「向去却来して、時々、初心なりし時の態をもてし」などと用い、特に「向去却来」

と続けて用いている。

また意味用法に少し違いはあるものの「却来」の語を引く謡曲が、世阿弥や元雅の作品であることも注意したい。^(注1)

・「当麻」…ここを去ること遠からずして、法身却来の法味をなせり。（世阿弥作）

・「箴」…魂は陽に帰り、魄は陰に残る、執心却来の修羅の妄執、去つて生田の名にし負へり。（元雅か元能作か）

・「歌占」…蘇命路に却来して、再びここに蘇生の寿命の、種となるべき歌占のことば。（元雅作）

・「六代の歌」…捨てて交はる世の中の、夢も現も隔てなく、向去却来の境界に至る。（世阿弥作か）

【真実報恩謝】

その次に注目したいのが「真実報恩謝」という言葉である。手紙では「これぞまさしく真実報恩謝の、路に出で入る修行の別れ」とあった。これは『悲華經』にあるという偈文「棄恩入無為、真実報恩謝」の後句で、恩愛の心を振り捨てて仏道に入ることこそ、まことに恩愛に報いること、という意味であり、

出家の功德を讃える言葉である。出家の際に唱えた。

この偈文から思い起こされるのが、世阿弥の次男元能が父の芸話を聞き書きし、永享二年（一四三〇）十月に『申楽談儀』にまとめ、芸道を捨てて出家する志を述べた同書奥書の「棄恩入無為、真実報恩謝」である。筆者は、劇中の松若の出家の姿の背景に、元能の出家がダブって来る思いを禁じ得ない。

【定めなき世の中々に生まれ来て】

次に耳に残るのが「定めなき、世の中々に生まれ来て」である。「定めなき無常のこの世に、なまじ生まれ来て」という意味で、「定めなき世の中」と「なかなか生まれ来て」とを掛けた表現であるが、これは、世阿弥またはその周辺の元雅や禅竹作の可能性が高い「蟬丸」の次第「定めなき世の中々に、憂き事や頼みなるらん」と響き合う。

【子を思ふ親の闇路】

最後に「子を思ふ親の闇路」をあげたい。これは親子恩愛の情の表現の慣用句で、元雅作の「隅田川」や元雅作の可能性が高い「経盛」の「人の親の、心は闇にあらねども。子を思ふ、道に迷ひの憂世ぞと、…」の類似表現も指摘できる。

〈文〉の詞章以外にも、作者を探る鍵は存在する。

例えば次の詞章や修辭技法である。

【地を走る獣、空を翔る翼】

親子のあはれについて「子を思ふ親の闇路」以外にも「地を走る獣、空を翔る翼まで、親子の道のあはれさは、心なしともいひがたし」とある。「地を走る獣」は、世阿弥周辺の作と推測される「天鼓」に同様の表現が見えることに注意したい。

【親千里を行けども子を忘れず】

これも、親子の情を綴る言葉で、「親千里を行けども子を忘れず（子はあつて千歳を経れども親を思はぬ習ひ）」などと使われ、「多度津左衛門」など親子物狂能にしばしば見える成句であるが、元雅作「隅田川」の「千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを」と最も響き合う。その他、世阿弥周辺の作である可能性の高い「木賊」に使われていて、注目したい言葉である。

【ほととぎす、ほど時過ぐれども】

【四鳥の別れ】

親子の道のあわれを説くクセのアゲハからトメにかけて、作者は次のように綴る。

シテ げにやかぞいろは、いかにあはれと思ふらん

地謡 三年になりぬ足引きの、山橘の色に出て、

鳴く音はそれかほととぎす、ほど時過ぎれども、世を鶯の逢ひがたき、親子の道すではや、思ひ四鳥の別れ路の、行方はいづく白露の、置き所定めなき、身の果ていかになりぬらん。

「鳴く音」「ほととぎす」「世を鶯」「四鳥の別れ」と、鳥に縁のある言葉を連ねてゆくが、技巧の冴えは傍線を付した「ほととぎす、ほど時過ぎれども」であろう。ホトトギスからホドトキスグレドモと「時鳥（ホトトギス）」を隠し、前句よりたどれば、別離から三年間の時が過ぎたことを表現している。

これと同趣の技巧が元雅作の「歌占」にある。歌占をする神職が我が子と知らず邂逅する場面で、季節も初夏。劇中でも占いつつ「時も卯月程時も合ひ合ひたり、や、今鳴くはほととぎすにて候か」と、ホトトギスの鳴く音に気付く場面もあるが、

子方 不思議や父にてましますかと言はんとす
れば白髪の

シテ 身は白雪の面忘れ

子方 されども見ればわが父の

シテ 子は子なりけり

シテ ほととぎすの

地謡

程経て今ぞ巡り逢ふ、占も合ひたり親と子

の、二見の占方の、まさしき親子なりけるぞ。げにや君が住む、越の白山知らねども、古りにし人の行方とて、四鳥の別れ親と子に、ふたたび逢ふぞ不思議なる、ふたたび逢ふぞ不思議なる。

と綴ってゆく。頭韻・重韻の手法は世阿弥にも禅竹にも元雅にもみられるが、「敷地物狂」の右の場面は「歌占」により近い。しかも後文の「四鳥の別れ」は『孔子家語』顔回篇から出た「親子別離の悲哀の譬え」であるが、現行曲二百数十番のなかでは元雅の「隅田川」と廃曲「経盛」に見えることも注意される。

【世を鶯】

また、右に触れた「世を鶯」は「世を憂し」と「鶯」を掛けた言葉であるが、現行曲二百数十番のなかでは「寝覚」「竹雪」そして「簾」の三曲に使われている。「竹雪」は禅竹時代に存在したことが近年明らかにされたが、「却来」のところであげた「簾」ともども、元雅や禅竹など世阿弥周辺の作品である可能性が高い。

さて、「敷地物狂」の作者については、伊藤正義氏・天野文雄氏・大谷節子氏の協力で大槻文蔵氏が復曲した際のパンフレットに、天野文雄氏が『敷地物狂』

の作者——「向去却来」をめぐって——、大谷節子氏が『敷地物狂』の趣向」で、金春禅竹説を展開しておられる。しかし、これまで検討して来たキーセンテンスやキーワードの使い方から見ると、平明な文章ながら禅林の語句の効果的な利用や、目の前の狂女の捧げた薦の中の文が自分の置手紙だったというこのドラマの意外性は、観世元雅の作風や修辭との共通性がより多く指摘できると思う。私としては観世元雅の作品と考えている。

五 勸進帳ほかの〈読ミ物〉

今まで見て来た文や文書は、まれにサシ調のフシの部分もあるが(例、「熊野」「敷地物狂」)、コトバが圧倒的に多かった。拍子に合わないのはもちろん、囃子のアシライもない。しかし能には、拍子に合い、囃子がアシラウ文書もある。

それは〈読ミ物〉と呼ばれているもので、現行曲では、「安宅」の勸進帳、「正尊」の起請文、「木曾」の願書の三曲がある。今「安宅」の勸進帳を左に示す。リズムを感得すべく、上半句と下半句から成る句は、その間を少しあけ、いわゆる分離のトリはハ

イフンで結んだ。

それつらつら、惟んみれば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。ここに中頃、帝おはします、おん名をば、聖武皇帝と、名付け奉り、最愛の夫人ふにんに別れ、恋慕止みがたく、涕泣眼にあらく、涙玉を貫く、思ひを善途に翻して、盧遮那仏を建立す。かほどの霊場の、絶えなんことを悲しみて、俊乗坊重源、諸国を勸進す、一紙半銭の、宝財の輩は、この世にては、無比の楽に誇り、当来にては、数千蓮華の上に座せん、帰命稽首、敬つて白すと、天も響けと読み上げたり。

このように〈読ミ物〉は、読み下し漢文体の最も散文的な文章を、大鼓・小鼓のリズムに乗せて読み上げるため、作曲は平ノリ(上半句七字・下半句五字の七五調の句が基準。十二字八拍)を主体としながら、中ノリ(上半句八字・下半句八字の八八調の句が基準。歌詞の二字一拍分として、さくさくと謡って行く)も交え、トリ(四拍で一句)や片地(六拍で一句)などを多用するのでリズムが複雑になり、しかも場面の劇的緊張と相俟って、まことに至難の技とされている。

三曲のうち、勧進帳と起請文が自己の真の目的を隠蔽し、その場を逃れるために即席で作成しつつ読み上げる、偽りの勧進帳や起請文であるのも興味深く、より緊張感がつのる。願書は、文名高い大夫坊覚明が義仲の命令で即座に筆を走らせた先勝祈願の文書であり、前の二曲とは趣を異にし、格調高い文勢は戦い前の心の高揚をも伝えている。

現行曲は三読物さんよみものの名のとおり三曲であるが、実は廃絶曲にもある。足利尊氏の命令で疋田妙玄が願書を書き読み上げ、篠村八幡に奉じる「篠村」の願書、入唐した吉備真備がパズルのような野馬台の詩の解読を試され、難読の詩文に進退きわまったとき、長谷観音の霊験で現れた蜘蛛の糸を頼りに読み上げてゆく「吉備」の野馬台の詩などである。

これらの「読ミ物」は観阿弥・世阿弥たちの能にはなく、能の技法が発達した世阿弥以降の工夫創案か、世阿弥や元雅・禅竹らいわゆる世阿弥周辺以外の役者たちの創意によるものと推測されている。一方、文や文書（諷誦文・赦免状・御教書・売券など）は古作の能から見られ、それらを効果的に用いて劇を進行させてゆく作品は、観阿弥や世阿弥・元雅・禅竹などの能に多い。こうした「文」やそれに準ずる

文書の使用などからも、能作の流れが看取できる。

ドラマの中の文書は、このように劇の導入や頂点をなし、結末を導く。ときに主人公の運命を変え、ときに絶対絶命の危機から救う文や文書には、それ自身にもドラマがある。手紙が語るドラマである。

そして、こうした作劇の流れは、演劇だけにとどまらず、手紙そのものを独立させて、それを鑑賞する作品をも生み出した。例えば近世では井原西鶴の『万の文反古』が名高い。近代には夢野久作（一八九〇—一九三六）が、一九三三年（昭和八年）に発表した『氷の涯』^{（注2）}などの書簡体小説の世界にも及んでいるのである。

注1 文中には「向去却来の道に出でば、再び御目にかからん事、疑はで待たせ給ふべし」と松若は再会を予告している。ワキの道行の「昔のあとに帰り来る」、母の登場歌の「我も越路に帰る鷹」、同じく母親の心情を歌う「行きてやみまし旧里の道」、さらに「古きすみかに帰り見れば」などの詞章には、一度は故郷を離れた子と母の、お互いの故郷への帰還を願う心が、そして別離と再会の姿、まさに「向去却来」の姿が強調されている。

注2 『氷の涯』は親友へ宛てた長文の手紙そのものが小説世界を形成する。その冒頭は「この遺書を發表するなら、なるべく大正二十年後にしてくれ給え。今から満十個年以上後の事だ。それでも迷惑のかかる人が居そうだったら、お願いだから發表を見合わせてくれ給え」である。死を決意した主人公が、波瀾万丈の過去語りをするのが面白く、死者によ

る生前の語りを主体とする、いわゆる夢幻能の構想と重なる。手紙の相手が親友すなわち読者であり、夢幻能ではワキが観客の代表と把握した野上豊一郎の説とも響き合う。これらについては『夢野久著作集』1の月報（一九九六年十月 葦書房刊）に書いた。

〔付記〕 本稿は、一九九七年八月二十八日から三十日まで、ハンガリーのブダペストで開催された「*ew's Budapest 1997*」（第七回ヨーロッパ日本学研究協会）における、美術・芸能部会での発表を、補訂したものである。

表章先生は、一九九八年三月をもって、四十七年の長きにわたって勤務された法政大学を退職される。私は、表先生のゼミナールに学んだ学部三年の一九六四年春以来、学部・大学院、文学部・能楽研究所と、教えを受け、多くの事を学び、その学恩に浴し続けてきた。

初めての学会発表が一九六七年度の国文学会で、この時の発表「物狂の系譜」は本誌第十八号に載せていただき、励みになった。今回、先生の退職記念号に、再び物狂に関する小論を発表することになったのも、拙い内容で誠に忸怩たるものがあるが、なにかの縁かと思う。ふつつかで常人の私は、超人的なエネルギーで能楽研究を開拓し推進しておられる表先生の偉大な業績を、ただただ仰ぎみばかりであるが、せめて万分の一でも先生へのご恩返しができればと思っている。

表先生、ありがとうございました。

（にしの はるお・文学部教授）

